

## ・はじめに

考古博物館が活動をはじめ、3年を過ぎた。2年目には入館者数がやや減少したが、3年目は逆に初年度に迫る入館者を迎えた。もとより評価は、単なる入館者数の増減ではなく、展示等の活動の深化と、更なる業務の充実の反映として、評価していきたい。

## ・常新展示とシンポジウム等

春・秋2回の特別展は、春が「貝の来た道～東の道は存在したか?～」と題して、副題に示すとおり、弥生時代において九州島の西側を北上する経路に対して、古墳時代に成立したと見られる「東の道」の検証を中心とし、秋の日韓交流展では「稲の来た道」と題して、大きくはアジア史を基礎付けた稲作の発生と伝播の中で、朝鮮半島と列島弧の果たした役割や交流の実態を焦点として開催した。

各テーマは、これまでとかく北部九州や畿内を中心として論じられてきた。しかし、近年では、南九州が果たした役割の重要性が、史資料の蓄積から浮かび上がってきており、いずれもそうした観点で見直しを図ろうとするものであった。

また、それぞれの展示に因んで開催した講演会・シンポジウムは、春は木下尚子氏（熊本大学）の講演会、秋は田崎博之氏（愛媛大学）をコーディネーターとして韓国から安承模氏（円光大学校）、安在皓氏（東国大学校）、孫峻鎬氏（韓国考古環境研究所）、当館から東憲章が加わったシンポジウムとした。とりわけ、蓄積めざましい韓国に於ける最前線の稲作情報を発信できたと考える。

企画展は、夏は「甕は輝いたか～なぜ国分寺は建てられたのか～」とし、冬は「中世日向を考える」と題して開催した。夏には、永山修一氏（ラサール学園）、筈瀬明宏氏（西都市教育委員会）に、冬には福島金治氏（愛知学院大学）にそれぞれ講演をお願いした。

いずれも考古資料のみならず、文献資料からのアプローチも示す内容であり、幅広い歴史領域の重要性を改めて認識するものであった。

こうした特別展・企画展の開催を挟む一月ほどの期間に行っていた展示は、昨年に増して「テーマ展」として格段の充実を図ることができた。「土器の紋様」「九州の廃寺」「古代の調理法」「支石墓の時代」「神護石（古代の山城）」などであったが、学芸員の創意工夫により、コンパクトな展示でこそ、逆に伝えられる考古学情報を発信することができた。

## ・学会・大学等との共同

一方、学会や大学等との共同については、秋に東アジア規模での国際学会・会議を開催することが出来た。公開講演会「考古科学の最前線」は、「西都原から世界を駆ける文化財保護」と題して、俳優荻谷俊介氏の特別講演「埋蔵文化財と未来」に、日中韓の研究者による発表などを、宮崎市民プラザオルブライトホールを会場として行い、翌日には当館に会場を移し、日本文化財科学会との共催した「東アジア文化財保存修復国際会議」を「東アジアの文化財保存修復事情」と題した専門家会議で論議が交わされた。

この国際会議の開催は、古墳群の保存整備と共に、全国的にも注目される保存状態の良好な鉄製品の保存処理を進める当館にとって貴重な体験となった。なお、この国際会議開催を期に、常新展示の特徴を示す試みの一つとして、各時代等を一字に象徴させた「書」と、解説した一文を日中韓英の4カ国語表記で構成したパネルを加えた。

その他、鹿児島女子短期大学との共催や柳井茶白山古墳研究会と合同調査会なども開催した。鹿児島女子短期大学では、「『WE LOVE 鹿児島!』プロジェクト」と

した2回のシンポジウムを計画し、第1回は「西都原古墳群で鹿児島県の歴史文化を考える」として考古博を会場に、第2回は「『種子島広田遺跡』を知ろう!」として鹿児島県黎明館を会場に行われた。柳井茶白山古墳研究会との合同調査会は、現在当館で進めている西都原古墳群169・170号墳出土の埴輪の整理研究の一環として行ったもので、全国的視野から当該資料の位置付けを検討する機会となり有意義であった。

単独の館の枠に閉じこもらず、全国の学会や大学等との共同は、博物館運営の上で必須要件であり、その点でそうしたネットワークを引き続き維持し、発展していくことが必要である。

#### ・講座と少年団

講座は、考古学の基本について座学を中心としたものを「考古博講座」とし、体験的な内容を中心としたものを「体験講座」として実施した。

考古博講座は、「遺物の謎」を共通テーマとして、県及び市町村の埋蔵文化財担当者を講師に迎え、「石器」「土器」「金属器」「木器」の4回開催した。県下に於ける資料の蓄積はめざましく、各々直接の担当者から、その最先端情報を発信する場となった。

体験講座は、特別展等との連動も考慮しつつ「貝輪づくり」「カラー勾玉づくり」「大型縄文土器づくり」などのものづくり、それに「掘る! (体験発掘)」として46号墳(前方後円墳)の発掘調査を、また「街角考古学」は特に市街地の下に没した遺跡を対象として、今回は下北方と大淀古墳群について歩いて見学した。

少年団の活動は、「織物作り」を年間テーマとして「からむし」を材料として「アンギン」の製作を行った。単なる工作体験から、本来目的である「古代生活」の体験へと、どのように深化させることができるか、一層の工夫を積み重ねていきたい。

#### ・調査・研究

昨年度からスタートした「県内出土古墳時代鉄製品集成事業」とした鉄製品の保存処理を進めるためのカルテづくりは、軟X線撮影、実測図作成など基礎的な資料化を行うと共に、緊急を要する鉄製品についての保存処理を行った。

古墳群の保存整備事業の一環として進める発掘調査は、継続して46号墳を行い、169・170号墳の報告書刊行に向けて、犬木努氏(大谷女子大学)と共同で出土埴輪の整理を進めた。

また、111号墳については、墳丘整備を行い、継続して墳頂部の遺構表示や葺石整備などは次年度実施としている。

男狭穂塚・女狭穂塚の地中探査は、3ヶ年目の最終年度として、女狭穂塚と男狭穂塚の周壕の重なりなどを対象に、昨年度より探査対象範囲を2倍ほど広げて実施した。詳細な内容を整理した報告書は、年度末に刊行している。

また、各学芸員・整理専門員等の研究成果についても、年度末に刊行した『研究紀要』に示されている。

#### ・学校教育・生涯学習

学校関係の活用は、年々盛んになってきているが、その内容の充実を図ることから、活用の指針や方法をマニュアルとしてまとめた。しかし、これらも完成形ではなく、常に新たに更新され、進化しつづけることを前提としており、またそうした仕組みの構築を課題としている。

視察等も東アジア規模の各国を含め、数多く来館いただいた。博物館づくりや博物館の活用の実際と言った内容はもとより、観光資源としての博物館という視点での視察や具体的な活用もあった。

市民ボランティアによる古墳群及び博物館周辺の除草等の活動も継続され定着してきているが、観光も含め、幅広い生涯学習の充実の証しである。

館内解説等のボランティアスタッフの活動では、一昨年度開催したシンポジウムを書籍化すべく、テープ起こし原稿の専門用語等のチェックや全体構成の編集などを行い『海を渡った日本文化』として、またメンバーが分担執筆して、古墳群案内の手引ともなる『西都原古墳群―探訪ガイド―』をそれぞれ鉾脈社から刊行することができ、前者は、思わぬ宮日出版文化賞受賞という、評価を受けた。その他、古墳群の案内地図を作製すると共に、年度後半は原点となる展示解説資料づくりに取り組んでいる。

(北郷泰道)